

國學院大學学術情報リポジトリ

『枕草子』道隆の登場

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 駿 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002339

『枕草子』道隆の登場

序

「清涼殿の丑寅の隅の」の章段は、複数の逸話が組み合わせられて成り立っている。定子による各逸話と、逸話のきつかけとなる場面についての研究は、表現的な分析のみで留まっている。各逸話の背景を読み込み、章段のより深い理解を試みる必要がある。そのために、まず本稿では、章段前半部の清少納言の歌と藤原道隆の逸話を検討する。そして、当章段で作品上に初登場する道隆がどのような意味を持たされているかを明らかにする。

【場面1】は章段冒頭で、章段年時は正暦五年（九九四）の春と考えられる。道隆が亡くなる前年ながら、数か月後には定子の兄藤原伊周が内大臣に昇進する。中関白家の絶頂期である。

【場面1】

清涼殿の丑寅の隅の、北のへだてなる御障子は、荒海のかた、生きたる物どものおそろしげなる、手長足長などをぞかきたる。上の御局の戸を押し開けたれば、常に目に見ゆるを、にくみなどして笑ふ。^ア高欄のもとに青きかめの大きなを、すゑて、桜の、いみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いとおほくさしたれば、高欄の外まで咲きこぼれたる昼方、

（四九頁）^{（2）}

村田 駿

【場面1】傍線部アでは、高欄附近に青い花瓶が置いてあり、桜がこぼれるほど生けてある状況が写し出されている。

その状況を前提として、【場面2】が描かれている。

【場面2】

陪膳つかうまつる人の、をのこともなど召すほどもなくわたらせたまひぬ。「御硯の墨すれ」と仰せらるるに、目はそらにて、ただおはしますをのみ見たてまつれば、ほどどつぎめもはなちつべし。白き色紙押したためて、^ウ「これにただいまおぼえむ古きこと一つづつ書け」と仰せらるる。外にゐたまへるに、「これはいかが」と申せば、「とう書きてまゐらせたまへ。をのこは言加へさぶらふべきにもあらず」とて、さし入れたまへり。御硯取りおろして、「とくとくただ思ひまはさで、難波津も何も、ふとおぼえむことを」と責めさせたまふに、などさは臆せしにか、すべて面さへ赤みてぞ思ひ乱るるや。

春の歌、花の心など、さいふいふも、上臈二つ三つばかり書きて、「これに」とあるに、

^エ年経ればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

といふことを、「君をし見れば」と書きなしたる、御覧じ

くらべて、^オ「ただこの心どものゆかしかりつるぞ」と仰せらるるついでに、「円融院の御時に、^カ『草子に歌一つ書け』と殿上人に仰せられければ、いみじう書きにくう、すまひ申す人々ありけるに、『さらにただ手のあしきよき、歌の、をりにあはざらむも知らじ』と仰せらるれば、わびてみな書きける中に、ただいまの関白殿、三位中将と聞えけるとき、^キしほの満ついつもの浦のいつもいつも君をば深く思ふはやわが

といふ歌の、末を、『たのむはやわが』と書きたまへりけるをなむ、^クいみじうめでさせたまひける」など仰せらるるにも、すずろに汗あゆる心地ぞする。年若からむ人、はた、さもえ書くまじき事のさまにやなどおほゆる。例、いとよく書く人も、あぢきなうみなつつまれて、書きけがしなどしたるあり。

(五一頁)

突如、傍線部イ「御硯の墨すれ」と指示があり、傍線部ウ「これにただいまおほえむ古きこと一つづつ書け」との命令が、定子から女房達へ下される。突然の命令に女房たちは困惑する。

清少納言も同様に困惑するものの、傍線部エ「年経ればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし」の第四句「花をし見れば」を「君をし見れば」に差し替えて、定子という主君を讃える歌に詠み替え、提出する。「詠み替え」とは、この「年経れば」の元の歌が、摂政の藤原良房が娘の染殿后明子を鍾愛して詠んだものであり、その趣旨を主君称賛に替えたことである。この詠み替えに感心した定子は、傍線部オ「ただこの心どものゆかしかりつるぞ」とその機転を喜び、似たような話として、父道隆が三位中将であった頃の手柄話を披露する。それが傍線部キで

「しほの満ついつもの浦のいつもいつも君をば深く思ふはやわが」の第五句目「思ふはやわが」を「たのむはやわが」に詠み替えて、円融の激賞を買った逸話だ。ちなみに、これは永観二年(九八四)の話で、この章段の時点より一〇年前になる。

さてここには、清少納言の「君をし見れば」と、道隆の「たのむはやわが」という、二つの古歌の詠み替えが描かれている。これは必ずしも主君を讃える歌ではなかった古歌を主君を讃える歌に仕立て直した、という趣旨で共通している。たしかに、語句を入れ替えた清少納言の機智を褒めるのに適した逸話である。

しかし、語句の入れ替えを褒めるためだけにわざわざ道隆の逸話を語ったのだろうか。そして、この逸話によって、作品上に初登場する道隆にはどのような意味があるのだろうか。

一、清少納言の歌(二) 良房歌の背景

まず、定子が語るきっかけとなる清少納言の歌から検討する。清少納言は何故この歌を詠み替えてまで献上したのだろうか。

この歌の元となった良房歌を以下に示す。

染殿の后のお前に、花瓶に桜の花をささせ
たまへるを見てよめる 前太政大臣

年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし (『古今和歌集』巻第一 春歌上 五二番歌 四八頁)⁽³⁾
もちろん、良房歌の詞書が『場面1』の情景と近似しているため、清少納言はこの歌を選んだのだろう。また、良房歌は娘明子に対する父としての立場で詠まれている。定子はこの時18歳で、清少納言はそれよりも一回り程度の年長とみられるが、定子に仕

える女房の立場である。したがって、良房と同じ立場に清少納言が立つと定子に対して失礼にあたる。そのため、「花をし見れば」を「君をし見れば」に差し替えたのだろう。こうして、清少納言は立場を替えてまで詠んだこの歌によって、主上と並ぶ若く美しい中宮定子を讃えたのだ。

その称賛の句「君をし見れば物思ひもなし」は、まさに中関白家全盛期の満足感を表す表現だとして疑われてこなかった。

しかし、「物思ひ」がないことが「花をし見れば」という、順接の確定条件で表されるのは「君」や「花」がなかったならば「物思ひ」があったといえないだろうか。

つまり、これらの歌は単なる満足ではなく、「君」や「花」によって「物思ひ」が無くなった満足感を詠んだ歌と捉えられる。すると同時に打ち消しの形で「物思ひ」という背景を作品内呼び込む表現となっているのだ。

まず良房歌における「物思ひ」の背景を探る。「よはひは老いぬ」とあるように「物思ひ」は寿命であるが、だが、寿命という「物思ひ」は単に明子を見ることで解消されはしない。「花」にたとえられる明子の立場が重要である。詞書からは、后と呼ばれる時代の明子が老齢の太政大臣の良房と同席した春の日で、「花をし見れば物思ひもなし」の心境にふさわしい時に詠んだものと思われる。つまり、明子の協力によって良房のどんな「物思ひ」が「なし」となったかが問題である。期間を確認する。

清水好子氏は以下のように年代推定をしている。

「花をし見れば物思ひもなし」という歌意から、文徳帝即位、
染殿后明子腹の惟仁親王が立太子後のことと見たい。嘉祥三年（八五〇）以後のことになる。時に良房四十七歳。その死

は天安二年（八五七）であるから、それ以前の作である。

「花をし見れば物思ひもなし」という満足感に惟仁親王（後の清和天皇）が関わることは、明子の協力という点でも頷ける。嘉祥三年（八五〇）の良房は従二位右大臣で47歳、天安二年（八五八）の良房は従一位摂政太政大臣55歳である。たしかに、官位を極め、初老である40歳も過ぎていた。

しかし、文徳天皇との仲を考えると、文徳崩御後で清和即位後のことを詠んだ可能性が高い。立太子は即位を前提とするが、一年ふればよはひは老いぬ」と老齢を嘆く良房が立太子だけで安心したとは思われないのだ。

『吏部王記』承平元年（九三二）九月四日条は、藤原忠平から聞いた話を藤原実頼が重明親王に語った記事である。

四日、夕参議実頼朝臣来也、談及古事、陳云、文徳天皇最愛惟喬親王、于時太子幼冲、帝欲先暫立惟喬親王、而太子長壮時還繼洪基、其時先太政大臣作太子祖父、為朝重臣、帝憚未発、太政大臣憂云、欲使太子辞讓、是時藤原三仁又善天文、諫大臣曰、懸象無変事、必不遂焉、爰帝召信大臣清談良久、乃命以立惟喬親王之趣、信大臣奏曰、太子若有罪須廃点更不還立、若無罪亦不可立他人、臣不敢奉詔、帝甚不悦、事遂無变、無幾帝崩、太子繼位、（中略）此等事皆左相公所語也、

※太子＝惟仁親王 先太政大臣＝良房 信大臣＝源信 左相公＝忠平

ここから文徳には皇太子惟仁を辞退させ、長男惟喬親王を帝位に付けたいとの希望があったと目崎徳衛氏は説明している。この記事の他にも、惟喬の外舅の紀有常の官位昇進が無い事や、紀氏出身の僧正真済が引退に追い込まれるなど惟喬の勢力への圧力が確認でき、良房と文徳との間で皇位継承争いがあったとしている。

河内祥輔氏⁽¹⁾は、天皇制の皇統・血統を重視する立場から、「帝欲先暫立惟喬親王」の箇所等に注意を促している。「暫」とあるように、文徳自身も惟仁の即位を拒む意志はなく、従来の慣習どおりに幼なため惟喬を「傍系」として帝位につけ、惟仁の成長を待つ発言だったと解している。『吏部王記』の読みと皇位継承の慣行の解明には頷ける。たしかに、文徳の意志は源信らの発言によって中断される。源信の発言が良房に慮ったものと解しても、文徳の直系を維持するために危機感を感じて惟仁の即位を急いだとしても、どちらにせよ惟喬の即位に危険性があつたことを示している。その危険性の内実は目崎氏のいうような良房の動きであつたと考えられる。なぜなら、良房自身も高齢となつていふことを自覚しており、存命中に惟仁の即位を画策するであらうことは目に見えているからである。

これらの先行研究が指摘するように、惟仁立太子前後の期間は良房にとつて安心できるものではなく、むしろ歌にいう「物思ひ」の渦中であつたと考えられるのである。

即位後については、明子は清和と共に住み続けており、国母として祖父良房と協力して政治に関わつていたと目崎氏は指摘している。この明子との協力をもつて、有力な外祖父となつた良房に、歌に詠まれた「思ふ事なし」の感想が出てくるように思える。

【表1】清和即位前後の年表

嘉祥三年 ⁽⁸⁵⁰⁾	三月二日	仁明天皇崩、文徳天皇踐祚(良房47歳)
	三月二五日	惟仁親王(清和)誕生
仁寿元年 ⁽⁸⁵¹⁾	一月二五日	惟仁親王立太子
齊衡二年 ⁽⁸⁵²⁾	正月 七日	良房正二位に叙せられる
三年 ⁽⁸⁵³⁾	正月 七日	紀有常、従五位上
天安元年 ⁽⁸⁵⁷⁾	二月二五日	文徳、郊天祭祀を行う
二年 ⁽⁸⁵⁸⁾	二月 二九日	良房太政大臣となる
	八月	真濟、文徳の看病するも、非難され隠居
	二七日	文徳崩、清和踐祚
		良房清和の後見を行う(実質摂政)
貞観五年 ⁽⁸⁶³⁾	二九日	明子、清和と共に東宮へ
六年 ⁽⁸⁶⁴⁾	正月 一日	良房六〇の賀
	二月二五日	清和15歳で元服
七年 ⁽⁸⁶⁵⁾	四月 四日	清和天皇染殿に行幸、花宴
	一月 二日	この冬、良房大病を患う
	一七日	清和初内裏遷御(仁寿殿)
八年 ⁽⁸⁶⁶⁾	三月 一日	明子常寧殿に遷御
		清和染殿に行幸

即位後も明子同居

立太子後も画策

八月 一九日 良房摂政となる
 (871)
 一三年 四月 一〇日 良房准三宮となる
 (872)
 一四年 九月 二日 良房没
 (873)
 一五年 正月 七日 紀有常正五位下

(68歳)
 (69歳)

更に【表1】に示した同居期間には、清和の染殿への行幸や、良房の六〇の賀がある。この期間に到ってこそ、行幸を仰いだり、算賀を祝う余裕が出てきたと考えられる。そして、その象徴が人臣初の摂政に任じられたことである。

この立場は後に『大鏡』に「藤氏のはじめて太政大臣・摂政したまふ」と後世の人が良房を語る際に意識されるようになる。清少納言や定子が良房を話題にしたときも、人臣初の摂政は意識されたと考えられる。

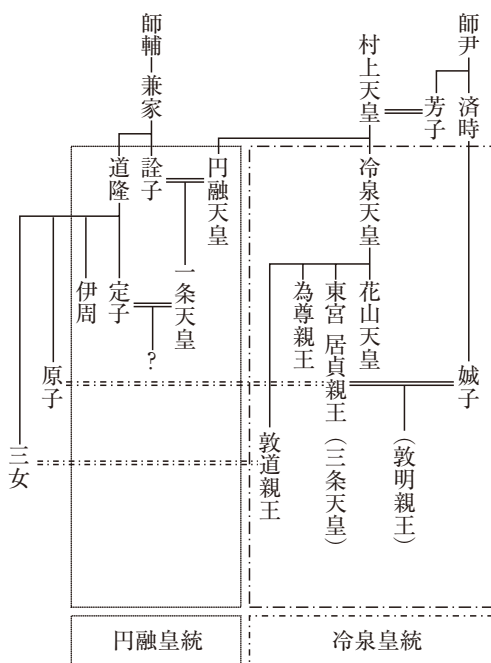
つまり、明子のおかげで良房が摂政に引きあげられたように、定子のおかげで道隆一族の栄達とその家に仕える清少納言の立場があると、歌い、讃えているのである。清和朝の良房、一条朝の父兼家に次いで三人目となる外祖父摂政の地位を願ったと思われる。こうして、明子と定子が二重写しにされ、道隆もまた良房と二重写しされているのだ。

二、清少納言の歌 (二) 正暦五年の春の「物思ひもなし」

この二重写しを考えると、定子を「君」とした詠み替えにも「物思ひ」が想定される。どのような「物思ひ」が定子によって「な

し」になったのだろうか。正暦五年（九九四）の春といえば、道隆政権が固まってきて、二月には積善寺供養があり、新造の二条の宮で作り物の桜を愛でた年であった。しかし、めでたいばかりの年であったとは思われないのだ。

【表2】 正暦五年の春の権力構造



【表2】には権力構造を图示した。東宮には居貞親王が立っており、再び皇統が冷泉皇統に戻ることになっている。また、円融皇統の一条には兄弟も子もない、対して東宮居貞には若い兄弟がいる状況だ。つまり、良房と文徳の時代と同様に正暦五年の春にも皇位継承問題が起きつつあるのだ。

更に、この正暦五年の春には、東宮居貞の第一子が生まれる。

それは、城子腹の敦明親王である。城子の父藤原濟時は、かつて道隆の父兼家がその兄藤原兼通によつて右大将の官位を剥奪された時、世間が憚る中その後任として名乗りをあげた人物だ。この懷妊が社会に不穏な空気をもたらしたことは、前年の正暦四年（九九三）閏一〇月一四日の『小右記』が伝えている。

十四日、戊戌、観修僧都来云、近曾行東宮更衣左大将濟時女、修法、猛靈忽出来云、我是九条丞相靈、存生之時、或寄仏事、或付外術、懇切致子孫繁昌之思、其願成就、就中小野宮太相国子族可滅亡之願彼時極深、施陰陽術欲斷彼子孫、所期先六十年、其驗已新、今依滅他之思、受苦極重、拔苦無期、小野宮相国子孫産時、吾必向其所妨此事、依存生心願、先所期六十年、其遣不幾、彼時外術今二年許也、其後可難廻此妨術、又此更衣已有懷妊氣、仍所来煩也、為斷他同胤云々、今聞此事覺往古事、雖云骨肉、可有用心坎、僧都云、忽造大威德尊可奉婦依者、然者可任天運者也、

（正暦四年（九九三）閏一〇月一四日条）⁽¹⁸⁾

※左大将濟時女・更衣＝城子 九条丞相＝師輔 小野宮相国＝実頼 僧都＝観修

濟時の娘城子懷妊の時、九条丞相つまり道隆の祖父藤原師輔を名乗る靈が出現したと伝えている。靈の出現の科学的真偽はともかく、城子の懷妊に際し、師輔が持ち出されたことが重要である。

師輔の靈は小野宮家を崇めている。そのため、小野宮家の藤原実資にこの話が伝えられたが、今回は小野宮家ではなく、小一条家の城子の懷妊を妨害している。師輔の靈は「為斷他同胤云々」と言うが、その範囲は不可解である。ここは、小野宮家を憎む生前の師輔の意志より、現在の政局が反映された結果、城子の懷妊が不調であることが師輔に結びつけて解釈されたと見るべきであらう。

う。このように、師輔の孫道隆と城子の父濟時との対立は貴族社会に広まっていたと考えられる。

更に、その翌月には、「朔旦冬至」の儀式において、濟時と道隆の息子伊周との間に論争があったことを『権記』は伝えている。

一日、甲寅 今日朔旦冬至、仍奉賀表、雨儀、天曆九年雨儀、御曆・番奏等付内侍所、今度不付、日上右大臣重信以表函付内侍還本所（軒廊、西面北上）、大臣第三間、納言第二間、宰相一間、經列北着本座（右返）、但左大将濟時左返、左右是非之由、或卿相争論云々（大将与権大納言伊周也）、

（正暦四年（九九三）十一月一日条）⁽¹⁹⁾

これが論争にまで発展した理由は、単なる間違いだけが原因とは思われない。やはり濟時と道隆一派との確執があったからこそで、公卿からも注目されており、その注目の度合いは日記に書き留めらるほどであったと考えられる。以上の濟時の行動は、隙あらばと道隆一派の転覆を狙っているようだ。

このような一連の行動は、『榮花物語』⁽²⁰⁾に見える東宮居貞が城子を優遇する状況の上で、正暦四年（九九三）四月二十二日に東宮へ入内した時から動いていたと考えられる。⁽²¹⁾

【表2】にあるように、後の長徳元年（九九五）には、道隆も娘の原子を東宮居貞へ入内させて対策している。入内の準備について倉本一宏氏は「道隆二女の原子が十三歳で裳着を行っていたのは、城子や濟時にとって不気味な前兆と感じられたかもしれない」と分析しており、城子参内の約二ヶ月前の正暦四年（九九三）二月二二日の原子の裳着が、東宮居貞の城子を求める動きに反応したようだとしている。⁽²²⁾ また、この裳着は、敦道親王の元服に合わせて行われており、一緒に裳着を行った道隆三女は敦道のもと

へ入っている。どちらも冷泉皇統に寄る道隆の動きである。これらの行動は、自身の血脈を続けようとする一条に、道隆や定子に対する不審感を抱かせただろう。

このような背景を確認すると正暦五年の春は、皇位継承争いという「物思ひ」の種が蠢いていたと考えられる。したがって、清少納言の歌では、このような「物思ひ」を「なし」にする存在として、定子が詠まれていたと考えられる。つまり、清少納言による詠み替えでは、定子に一条の子が宿ることが願われており、そのため眼前に定子と一条が並ぶこの光景を讃えることになるのである。更には、明子と良房のように、定子の懷妊により道隆一族が引き上げられる願いが込められているといえる。このような意味を込めるための良房歌の詠み替えであったと考えられる。

そして、定子は【場面2】傍線部オ「この心どものゆかしかりつるぞ」と、清少納言の意図を察知している。この「心」は機転だけでなく、歌の心・意味をも含む。清少納言の歌に籠められた、新たな皇子の誕生と外戚の家の繁栄という願いを定子も察してこそ、その家の主、道隆の話を始めたと思われる。

こうして語られた逸話に、道隆は「ただ今の関白殿」と登場する。清少納言が持ち出した人臣初の摂政良房という「昔」に対して、「今」の関白道隆が対比されている。そして清少納言の歌で「年経れば」と詠われた、「三位の中將と申しける時」である一条即位前の「円融院の御時」に遡っていくのだ。

三、道隆の逸話（一） 円融天皇の背景

この逸話の中心は、【場面2】傍線部キ「しほの満つ」から始まる和歌の「思ふはやわが」という恋愛の文脈を「頼むはやわが」と、臣下が君主を頼みにする歌に読み替えたことである。この歌を円融は傍線部ク「いみじうめでさせたまひける」と激賞しているが、これも単なる読み替えの妙という技巧だけを褒めているのだろうか。また、道隆はこの詠み替えによって、円融天皇に何を伝えているのか疑問である。

【表3】道隆の逸話関連年表

貞元二年 ⁽⁹⁷⁷⁾	一月一日	兼家、右大將から治部卿に墮とされる
天元元年 ⁽⁹⁷⁸⁾	一月八日	兼通亡くなる
	四月一日	遵子入内
	六月二日	兼家勘事の後初めて参内
	八月二日	詮子入内
	十月二日	兼家従二位右大臣となる
	十一月二日	道隆右中將となる
二年 ⁽⁹⁷⁹⁾	六月三日	皇子亡くなる 中宮の位が空く
三年 ⁽⁹⁸⁰⁾	六月一日	詮子懷仁を産む
五年 ⁽⁹⁸²⁾	一月二日	超子亡くなる
	三月一日	遵子立后
永観二年 ⁽⁹⁸⁴⁾	一月七日	道隆従三位となる
	八月二七日	円融讓位 師貞(花山)受禪 懷仁立太子

(中略)

非参議

從三位 藤原国章(不男)

藤原道隆(32)

藤原義懷(28)

(永観二年(九八四)条)⁽²⁵⁾

台閣の筆頭は関白太政大臣藤原頼忠、次いで左大臣源雅信、道隆の父兼家はそれらに次ぐ右大臣に過ぎない。しかし、兼家は円融の生母安子の同母弟のため、円融朝では堂々たる当帝外戚である。ただ、【表3】に見える「治部卿に墮とされる」などの諸事情により、兼家は摂政関白にならない不如意な立場にあった。そのうえ、円融は、中宮に詮子を立てなかったことで、兼家と再び険悪な仲になっていた。したがって、兼家が、折り合いの悪い円融の皇子である懷仁を避け、花山の弟で、冷泉の皇子である居貞を擁立しないとも限らなかった。つまり、兼家との関係を修復しないと、円融は自分の血統を天皇家に残すことができない可能性を危惧していたと考えられるのだ。

そうした意味では、円融の讓位は、自分の皇子に位を継承させるための苦肉の策であった。切迫した状況の中この逸話のやりとりは行われたのである。

この時の道隆は32歳、円融はそれより5つ年少の26歳で、血縁的に二人は従兄弟の関係にあった。しかし、言うまでもなく、道隆は兼家の後継者であり、一連の者として円融と反目の状態にあっても不思議はない。しかし、先の【場面2】の道隆には、そうした様子は微塵も見えないのだ。この時の道隆が、円融の讓位の意向を知っていたかどうかは、定かではない。ただし、円融と兼家との関係が微妙なこの時期に、道隆が「思ふはやわが」を差

し替えて、「たのむはやわが」と詠んで、円融に対する忠誠の意思を込めた意味は、小さくなかったのではないだろうか。在位末期にあることが明らかな円融に対する誓いの言葉が、道隆の本心なのか、お世辞半分なのかは分からないにせよ、円融がこれを激賞し、歓迎したことからすれば、やはり単なる機知の話ではなかったと思われる。

四、道隆の逸話(二) 道隆の背景

道隆側の条件を再確認すれば、兼家と同様に冷泉の居貞を頼みにするという方法もあった。居貞の母超子は兼家の娘で、道隆と同母の兄弟である。恩恵を受けられる可能性はある。

ただ、超子は逸話から二年前の天元五年(九八二)正月二十八日に亡くなっている。

廿八日、辛酉、(中略)今日數右大臣円座、今朝院女御頓滅云々、梅壺今夜退出、服親王卿達依不數右大臣座退下、

(天元五年(九八二)正月二十八日条)⁽²⁶⁾

先の明子と清和の例からも明らかのように、国母となった場合の権力は強大だ。ましてや両親王は未だ幼く、意のままであろう。道隆や兼家たちにとって亡き超子の息子より、詮子の息子を擁立させる方が有利だとも思われる。

さらに未来に目を向けてみよう。花山朝では関白太政大臣以下の大臣の構成は、円融朝と変わらない。しかし、新たな外戚となった藤原義懷は権中納言ながら権勢を振るい、その腹心だった藤原惟成は、あまりの強権ぶりに「五位の摂政」と揶揄されるほどであった。この義懷は、道隆の父方の従弟に当たるが、【表5】に

【表5】花山朝で義懐に追い抜かれる道隆

道隆		義懐	
康保四年(九六七)	15 従五位下・昇殿	15	天禄二年(九七一)
康保五年(九六八) 安和元年	16 侍従・左兵衛佐	16	天禄三年(九七二)
安和二年(九六九)	17	17 従五位下	天禄四年(九七三) 天延元年
安和三年(九七〇) 天禄元年	18	18 侍従	天延二年(九七四)
天禄二年(九七一)	19 右衛門佐	19	天延三年(九七五)
天禄三年(九七二)	20	20 従五位上・右兵衛権佐・昇殿	天延四年(九七六) 貞元元年
天禄四年(九七三) 天延元年	21 従五位上	21 正五位下	貞元二年(九七七)
天延二年(九七四)	22 藏人・伊予権介・左近少将	22 右近衛少将	貞元三年(九七八) 天元元年
天延三年(九七五)	23 正五位下	23 美作権守・春宮亮・昇殿・禁色	天元二年(九七九)
天延四年(九七六) 貞元元年	24 備後権介	24	天元三年(九八〇)
貞元二年(九七七)	25 従四位下・少将・備中権守・昇殿	25	天元四年(九八一)
貞元三年(九七八) 天元元年	26 右近中将	26 備前権守	天元五年(九八二)
天元二年(九七九)	27 備中権守	27	天元六年(九八三) 永観元年
天元三年(九八〇)	28	28 従四位上・侍従・藏人頭・東宮昇殿・朱雀院昇殿・禁色・右近中将・従三位・正三位	永観二年(九八四)
天元四年(九八一)	29 従四位上	29 参議・従二位・権中納言	永観三年(九八五) 寛和元年
天元五年(九八二)	30 正四位下		寛和二年(九八六)
天元六年(九八三) 永観元年	31		
永観二年(九八四)	32 従三位		
永観三年(九八五) 寛和元年	33		
寛和二年(九八六)	34 正三位		

みるように花山朝では年少である彼に追い越された形になる。

このような未来の話について、花山天皇となる師貞が皇太子である以上、早晩、義懐に権力が転がり込むことは分かりきっていた。逸話は、そうなる寸前の時代であり、道隆にとって今後の自分の権勢を占う意味で、岐路に当たる時期であったと思われる。

そうした中で、円融にすぎるような「たのむはやわが」という物言いは、単にお世辞では片づけられない。道隆は、言葉遊びの余興を機知で乗り切ったというよりは、現実の自分の立場における切実な危機感が、その機知に結びついた見るべきではないだろうか。したがって、円融へ「たのむはやわが」と忠誠を誓う歌を献上することは、道隆にとっては花山朝への対策をしつつ、一条朝への布石の一手であったと考えられる。それは、前述の通り冷泉皇統に背くりリスクを負う重い言葉であった。

こうして、立太子に際して自身の血統を継ぐ懐仁を援護してくれるであろう道隆の行動は、讓位の意を固めた円

融にとつて嬉しいものであったと考えられる。だからこそ、円融は「いみじうめでさせたまふ」と道隆の歌を激賞したと読めるのだ。

このように逸話内部を解釈する時、円融の悩んでいる時期に、この歌を贈った道隆の手腕が目される。この逸話のように円融と道隆の協力の結果生まれたのが当該場面の正暦五年の春であった。その春には「いつもいつも」と忠誠を誓った道隆によって、定子と一条が並ぶ「思ふ事なき」光景が繰り広げられているのだ。

結

二にのべた通り、章段当時の正暦五年の春にも「物思ひ」の種が蠢いていた。それは道隆の逸話と同様に円融皇統を続けようとする「物思ひ」であった。つまり、定子の逸話は正暦五年の春の「物思ひ」と、同じ「物思ひ」に尽力する道隆を語っていると捉えられる。

その逸話の中では、【場面2】傍線部キで「いつものうらのいつもいつも」と円融天皇への忠誠がいつまでも続くことを強調していた。これは、城子入内に前後して、原子の裳着を行った道隆に対して不安を感じているであろう「一条天皇へ、「忠誠は変わらない」と先代からの君臣の誓いを確かめていることになる。ここには、一で確認した清少納言が歌った立太子に際して天皇と対立する良房とは正反対の、天皇と協力する道隆の姿が映し出されている。

つまり、清少納言の歌では、道隆は娘によって栄達を得る存在として良房と二重写しにされていたが。それに加えて、定子の逸

話では正暦五年の春の「物思ひ」を解消させると共に、道隆が良房を上回る人物であると表現していると考えられるのだ。

このように道隆の初登場は語られていた。従来清少納言の秀句を褒めるための逸話とのみ解釈されてきたが、その背景を読み込むと、道隆は良房と対比され、天皇と協力する存在という印象を付されて登場していたと考えられるのである。

〔注〕

(1) 雑纂本系統による。

(2) 松尾聰 永井和子『新編日本古典文学全集「枕草子」』小学館 平成九年

以下、枕草子本文の引用は全て本書による。

(3) 小沢正夫 松田成穂『新編日本古典文学全集「古今和歌集」』小学館 平成六年 四八頁

(4) 場面の近似以外にも、「伊周の朗詠が宮を讃えるものであったこと」「女房たちを急かす定子の台詞がヒントとなっていること」などが要因だと先行研究では指摘されている。

女房たちを急かす定子の台詞には、難波津の歌が例としてあげられている。多くの注釈等が初歩的な歌という意味で捉えている。対して、深沢三千男氏は以下のように論じている。

「この花」を目前の花を具体的に直接指して言ったものと解すると、「この花」は王仁の意識の中にある大鷦鷯皇子を指している事になる。だからこの歌は必ずしも手習用の初歩的な歌で知れ渡っているから、漠然と引き出すに出したというわけではなく、やはり正答を引き出すために意図的な呼び水、糸口、ヒントとして提示された

ものなのであり、仁徳天皇は難波高津宮を開いたのであるから、これまた「日も月も……」から後引の正答へつながる、他ならぬ宮ほめの文脈で受け取られるべきものではないだろうか。

深沢氏は、伊周の朗詠には「花」に大鷦鷯皇子を喩えて讃える歌としての共通点があり、これも正答を引き出すヒントだと指摘している。

しかし、この指摘はこれにとどまらず、詠歌背景を考えれば、「皇位継承を願った歌」あるという点も共通しているのではないだろうか。大鷦鷯皇子は仁徳天皇として即位する以前に、菟道稚郎子と皇位を譲り合った人物である。その譲り合いの間に、大山守皇子が皇位を狙い争いを起こしている。

つまり、本稿の一、三で論じる「良房歌の背景」「円融天皇と道隆の逸話の背景」と皇位継承争いという点で共通していると考えられる。ただ、この背景までも定子が意図したかは、章段後半部に見られる「村上天皇と芳子との逸話」を含めて考察しなければいけないことであり、稿を改めて考えたい。

深沢三千男「枕草子余滴―第二十「清涼殿の丑寅の隅の……」段の受取り方について―」（神戸商科大学経済研究所「人文論集 第25巻第1・2号」神戸商科大学経済研究所平成元年一〇月 六頁）

小島憲之 直木孝次郎 西宮一民 蔵中進 毛利正守『新編日本古典文学全集』日本書紀② 小学館 平成八年 一八頁

(5) 清水好子「宮廷文化を創る人」『清水好子編文集 第三卷 王朝の文学』武蔵野書院 平成二六年 三八頁

(6) 米田雄介 吉岡真之『史料纂集』吏部王記「続群書類従完成会 昭和四九年 五二頁 承平元年（九三二）九月四日条

なお、古記録等の史料については、新字に統一し、割注は（ ）に入れ、その他注記等を参照して表記を改めた。以下の史料に対しても同様の処理を行っている。

(7) 目崎徳衛「在原業平の歌人的形成」『平安文化史論』桜楓社 昭和四三年 一九三頁

「文徳・清和両天皇の御在所をめぐって―律令政治衰退過程の分析―」『貴族社会と古典文化』吉川弘文館 平成七年二八頁

(8) 文徳崩御後から良房の死の翌年の貞観一五年（八七三）正月に正五位下に叙されるまで、二二年間も従五位上に止められた。

「古今和歌集目録」塙保己一『群書類従 一六輯』続群書類従完成会 昭和九年 一二一頁

(9) 黒坂勝美『（新訂増補 国史大系）日本三大実録（前編）』吉川弘文館 昭和四九年 四八頁 貞観二年（八六〇）二月二五日条

(10) 瀧浪貞子氏も、良房は惟仁立太子後「郊天祭祀」を復活させるなどして権威付し、世評を変えようと奔走していたとしている。

瀧浪貞子『藤原良房・基経』ミネルヴァ書房 平成二九年二〇七頁

(11) 河内祥輔『古代政治史における天皇制の論理』吉川弘文館 昭和六一年（八贈訂版）平成二六年 一八一頁

(12) 黒板勝美『新訂増補 国史大系』日本三大実録(前編)

吉川弘文館 昭和四九年 一三二頁 貞観六年(八六四) 二月二十五日条

(13) 黒板勝美『新訂増補 国史大系』日本三大実録(前編)

吉川弘文館 昭和四九年 一一八頁 貞観五年(八六三) 一〇月二六日条

(14) 黒板勝美『新訂増補 国史大系』日本三大実録(前編)

吉川弘文館 昭和四九年 一九三頁 貞観八年(八六六) 八月一九日条

なお、良房の任摂政については、天安二年(九六九)条『公卿補任』には「十一月七日宣旨為摂政」とある。摂政が常置の職でないこと、良房が人臣初の摂政であることから、天安二年(九六九) 十一月七日から、実質的な摂政であったとみておく。

黒板勝美『新訂増補 国史大系』公卿補任(一) 吉川弘文館 昭和五七年 一一一頁

(15) 村松博司『日本古典文学大系』大鏡 岩波書店 昭和

三五年 六五頁

(16) 良房と道隆は重ねて解釈されるが、清少納言の立場について説明が必要だ。

清少納言の歌は、「君をし見れば」と立場を替えて詠んだものの内容は伊周に詠歌を進めるくだりがあるように、道隆もしくは伊周などの中宮の親兄弟が詠者としてふさわしいものである。これは、良房歌が親から娘への詠歌であることに由来している。そのために清少納言は立場を替えている。つまり、清少納言は道隆の代役となっているのである。

続く定子が語る逸話では、本物の道隆が示される。このあと清少納言は「年若からむ人、はた、さもえ書くまじき事のさまにやなどぞおぼゆる」と恐縮している。若いような人には書けないだろうという言葉は、謙遜以上の意味があるのではないだろうか。

「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など」の章段をみれば、道隆の戯言の中に「あなはづかし。かれは古き得意を。いとにくさげなるむすめども持たりともこそ見はべれ」(二〇三頁)という発言がある。「かれ」は清少納言をさす。

戯言であるから「あなはづかし……いとにくさげなるむすめども持たりともこそ見はべれ」などと、清少納言は思っていない。ただ「古き得意」という記述からは、道隆の二回り下と推定されるものの、清少納言は定子の女房連中の中で道隆と過去を共有出来るほどの年長の立場にあったと考えられる。本稿の三節では、円融時代の道隆を考えた。そこには、懷仁(一条 即位に協力する道隆の姿があった。清少納言は「古き得意」として、このような昔を共有していたのではないだろうか。だからこそ「年若からむ人」には思いつかない、道隆の気持ちに成り代わり「年ふれば」の歌を詠むことができたと考えられる。

つまり、清少納言は道隆の代役として適切であり、その歌から引き出される良房は道隆と重ねて考えることが可能なのである。

(17) ここに「戻る」と書いたのは、冷泉皇統が直系であるという意識が当時あったと考えられているからである。

河内祥輔氏は、天皇制における血統を重視して皇位継承を

考察している。その立場から、六世紀の皇位継承の方法の一つとして、本来の直系から外れた天皇がその地位を補強するために女系による直系の血統の継承が行われるとしている。

その方法は、六世紀以後も度々用いられている。冷泉の代でも昌子内親王と婚姻することによって、本来の直系との血統をつなげ権威補強をしていると説明される。昌子は朱雀天皇の唯一の子であり、母方は、醍醐天皇の東宮で父より先に亡くなった保明親王の娘、熙子女王である。父系母系から、冷泉皇統の正当性を補強しているという。

河内祥輔『古代政治史における天皇制の論理』吉川弘文館昭和六一年（贈訂版）平成二六年 二九二頁

また、保立道久氏は円融皇統が「後朱雀」「後冷泉」という冷泉皇統寄りの院号を用いている点からも、冷泉皇統が直系であるという意識があったと論じている。

保立道久「平安時代の王統と血」（『別冊文藝・天皇制……』『歴史・王権・大嘗祭』）河出書房新社 平成二年一月 六六頁

また、山本一也氏は河内氏と同様に血統の上で冷泉皇統が直系と意識されていたとする。更に、守平親王（後の円融）立太子の二日後に所生子のない昌子が立后しており、その際懷子が女御となっている点に注目している。この現象は、守平の立太子および後に想定される即位は昌子に子がなかったための中継ぎの処置だと指摘し、守平母懷子を女御、昌子を皇后と区別することで、昌子に子が生まれた際に冷泉皇統に戻ることを主張していると説明している。

この説を参照すると、懷子所生の守平が花山天皇として即位したことは、昌子と区別され懷子の子でさえ即位出来たことになる。すると、懷子より後見が厚い超子所生の親王が立太子する可能性は高かったと考えられる。

山本一也「日本古代の皇后とキサキの序列―皇位継承に関連して―」（日本史研究会「日本史究 四七〇号」日本史研究会 平成一三年一〇月 五〇頁）

(18) 東京大学史料編纂所『大日本古記録』小右記（二）岩波書店 昭和三四年 二八八頁

(19) 渡辺直彦『史料纂集』権記』続群書類従完成会 昭和五三年 一九頁

(20) 山中裕 秋山虔 池田尚隆 福長進『新編日本古典文学全集』栄花物語（一）小学館 平成七年 四四二頁

(21) 以下、栄花物語本文の引用は全て本書による。

『栄花物語』には城子入内の理由を東宮居貞の所望だとしている。史料では『小右記』正暦四年（九九四）四月二二日条に見える。城子入内以前には兼家女綏子がいた。兼家が亡くなったあとに城子を所望したことについて、倉本一宏氏は政権担当者との円滑な人間関係が重要なことが解っていた上での我意とし、道隆の政治力と併せて考えるべきだと述べている。

山中裕 秋山虔 池田尚隆 福長進『新編日本古典文学全集』栄花物語（一）小学館 平成七年 三六七、四四二頁

東京大学史料編纂所『大日本古記録』小右記（二）岩波書店 昭和三四年 二六二頁 正暦四年（九九四）二月二二日条

倉本一宏『三条天皇』ミネルヴァ書房 平成二二年 二三

頁

- (22) 東京大学史料編纂所『大日本古記録』小右記(二)『岩波書店 昭和三四年 二九八頁 長徳元年(九九五) 正月一日条』

- 黒板勝美『(新訂増補 国史大系) 日本紀略』吉川弘文館 昭和四〇年 一八一頁 長徳元年(九九五) 正月一日条

- (23) 東京大学史料編纂所『大日本古記録』小右記(二)『岩波書店 昭和三四年 二六二頁』

倉本一宏『三条天皇』ミネルヴァ書房 平成二二年 二五

頁

- (24) なお、この「ども」に注目して清少納言以外の女房への配慮や、清少納言以外の女房の返答を考える論がある。そのような背景があつたかも知れないが、当稿では、章段上の逸話とのつながりから検討する。

三田村雅子「へ問とへ答——日記的章段の論理——」『枕草子表現の論理』有精堂 平成七年

高橋由記「花を瓶にさすこと——『枕草子』第二〇段に関して——」瞿麦会「瞿麦(第三号)」日本女子大学文学部日本文学科 平成八年

- (25) 黒板勝美『(新訂増補 国史大系) 公卿補任(二)』吉川弘文館 昭和五七年

- (26) 円融と兼家との不和について、『栄花物語』には、兼通が円融に「兼家が居貞を擁立するようだ」と吹き込んでいたという話が出ている。

また、沢田和久氏は「円融派」の兼通と「冷泉派」の兼家の対立と捉え、兼家が治部卿に落とされたことを以下のよう

に説明している。

関白兼通の一存で兼家の右大将を罷免し、治部卿に左遷させることなどは不可能であろう。円融の意向を受け、兼通はこのような措置を取ったと解する方が自然ではなからうか。冷泉には皇太子師貞の他に、兼家女超子との間に居貞が生まれていた。一方円融には、兼通女嬋子が配されているものの、いまだ皇子が誕生していなかった。円融は自己の皇位を継承させる直系の候補者をまだ得ることができていなかったのである。このような状況を考えると『栄花物語』に述べられている兼通の言動が事実としてあつたことも、十分に考えられるのではなからうか。そうであるならば、兼家が本当に居貞を擁立しようとしたが、その真偽はともかく、円融が兼通の発言を信用したのは不思議ではないと思われるのである。

山中裕 秋山虔 池田尚隆 福長進『新編日本古典文学全集』栄花物語(二) 小学館 平成七年 九五頁

沢田和久「円融朝政治史の一試論」(日本歴史学会「日本歴史 六四八号」平成一四年五月 六五頁

- (27) 結果、懷仁が即位したことについて沢田氏は「円融が十年以上在位し実績を積んだこと」「朝廷内で冷泉皇統を支援する有力貴族が居なくなっていること」「兼家は冷泉派といえるものの、懷仁であれば外祖父の立場であること」をあげている。ただ、遵子立后について「冷泉系居貞の外祖父でもある兼家とはなるべく手を組みたくはないという心情が働いたとも考えられる」とし、感情的には和解してはいないものの手を組んだという説明をしている。この分析によっても、兼

家が鍵を握っていることが明らかである。

沢田和久「円融朝政治史の一試論」(日本歴史学会「日本歴史 六四八号」平成一四年五月 七一頁)

(28) 東京大学史料編纂所『大日本古記録』小右記(二) 岩波書店 昭和三四年 一〇頁

〔付記〕

本稿は平成二九年年度國學院大學國文學會春季大会において口頭発表した内容をもとに執筆した。発表に際してご指導くださった皆様、この場を借りて御礼申し上げます。